



滝悦子・著  
『艦くう日々』  
求龍堂  
価格 1,365円 (税込)

『艦くう日々』の出版記念パーティには各界から1000人もの祝い客が詰めかけた。(VANジャケット) 創立者で、1960年代のアイビーブームの立役者であった故・石津謙介氏が祝いのスピーチを。



子問屋を営んでいたから、滝さんが「食」へのこだわりを強くしていったのも当然のことだったろう。長じて、そのこだわりは食のエンターテインメント誌『Menu』(プレジデント社)での執筆や、食をテーマにしたラジオのトーク番組で発揮されることになる。

滝さんの一家は、父と母、弟の4人家族だった。父の商売は順調で、滝さんも何不自由ない子ども時代を送る。ところが滝さんが14歳のとき、一家を思わぬ不幸が襲った。父が知人の借金の保証人になっていたため、全財産を手放さなければならなくなったのだ。

博多に移り住んだ一家に、悲

劇は続いた。博多でもう一旗揚げようと再起を誓っていた父が、急死してしまったのだ。母は被爆者で病弱だったから、経済力がない。国語が得意だった滝さんは、大学で国文学を修めるのが夢だったが、進学を断念せざるをえなかった。

執筆業のスタートも  
テレビ、ラジオ出演も  
思わぬきっかけで

高校卒業後、滝さんは憧れていた放送局でアルバイトとして働きはじめた。もちろん本当は正社員として働きたかったが、当時、地元の放送局は大卒しか正社員の採用はなかった。

そうして1年半が過ぎたころ、その放送局に出入りしていた放送作家の男性が、気働きのできる滝さんに、「ここにいても、一生、昇給もボーナスもないよ。知り合いの画廊が求人してるけん、行ってきんしゃい！」と、就職を後押ししてくれた。「一緒に採用されたのは、いいところの上品なお嬢さんばかり。私が採用されたのは、紹介者が良かったおかげ。採用したほうは、どうせ私がすぐ辞める

やろうから、一応、紹介者の顔を立てとこう、ということに雇ったらしいんです」と滝さん。だが、同僚が次々と退職していきなな、商売人の娘である滝さんの真価が発揮される。結局、画廊が閉鎖されるまでの7年半、勤め抜いたのは滝さんだけ。最後は、一人で店舗の切り盛りをやっていた。

画廊での仕事がそうであったように、ものを書く仕事も思わむところから転がり込む。30歳のとき、友人の経営するバーで遭遇した初対面のコピーライターと談笑するうち、「明日、脱サラして陶芸を始めた人の取材があるんだけど、取材記事を書いてみないか」と誘われた。彼は、滝さんがそれまでのものを承知のうえ。なのに滝さんが書け

ると踏んだのは、滝さんが語り部として優れていたからだ。話し上手で、聞き上手。滝さんは、短いセンテンスでの確に表現することに長けていた。

画廊の閉鎖後、職がなかった滝さんは、二つ返事で引き受ける。もともと23歳で結婚していたから、望めば専業主婦でいることもできた。しかし、滝さんには働きたい理由があった。原爆症の母の治療費を、夫に頼るのではなく、自分の手で稼いだかったのだ。

「それで原稿用紙400字詰めで5枚、記事を書いてもっていったら、「はい、合格！」と言われて、その記事が採用に。それまで取材記事を書いたことはなくても、活字中毒で、日ごろからよく本を読んでいたのが功を奏した。そして、次々と執筆



昨年5月の「博多どんたく港まつり」にて、夫の滝純一氏と。純一氏は画家で、福岡教育大学美術科教授。連れ添って今年で35年になる。